氏　　名	：	安部　久貴
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 311 号
学位授与年月日	：	平成３０年３月１６日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	サッカー指導場面における指導者の「言葉がけ」が選手の有能感に及ぼす影響―指導者の期待と選手の自己概念に着目して―
論文審査委員	：	（主査）　教授　松田　恵示 （副査）　教授　有元　典文　　教授　物部　博文 教授　鈴木　明哲　　教授　落合　　優 教授　坂西　友秀　　（横浜創英大学）

学 位 論 文 要 旨

本博士論文では、まず、スポーツ指導者の「言葉がけ」に影響を及ぼす要因としての選手に対する期待の影響を明らかにするために、中学生年代のサッカー指導者の選手に対する期待を定量化し得る尺度の開発を試みた（第 2 章【研究 1】）。そして、実際の指導現場において中学生年代のサッカー指導者が期待値の異なる選手に対してどのような「言葉がけ」を行っているのかについて明らかにするために、縦断的な観察調査を実施した（第 2 章【研究 2】）。その結果、以下の諸点が明らかになった。

1）　中学生、高校生年代のサッカー指導者による選手の競技力評価尺度は、「状況判断を伴ったボールコントロール技能」、「性格・競技意欲」、「ドリブル技能」、「対人技能」、「持久力」と「スピード」という六つの下位尺度から構成されることが明らかになった。また、競技力評価尺度の内的整合性の面からみた信頼性、因子的妥当性および内容的妥当性が確認された。さらに、競技力評価尺度の得点と期待値に正の相関関係を確認できたことから、競技力評価得点を用いて指導者の期待値を推定し得ることを明らかにした。

2）　三ヶ月間の観察調査において、指導者からの期待値の高い選手は、低い選手に比べて、全指標合計と「ポジティブな評価」、「直接的な示唆」、および「統制的な声かけ」の個別指標においてより高頻度の声かけを受けていることを明らかにした。

続いて、指導行動の認知に関わる選手側の要因として自己概念を想定し、その主要構成概念である身体的有能感をより詳細に検討するために、中学生・高校生年代の選手のサッカーに特化した有能感を測定し得る尺度の作成を試みた（第 3 章【研究 3】）。そして、実際の指導現場における中学生年代のサッカー指導者の選手に対する「言葉がけ」が中学生年代の選手のサッカーに関する有能感の変容に及ぼす影響について明らかにするために、縦断的な観察調査を実施した（第 3 章【研究 4】）。その結果、以下の諸点が明らかになった。

1）　中学生、高校生年代の選手のサッカーに関する有能感は、「状況に応じたパス＆

ボールコントロール技能」、「スピード」、「競技意欲」、「持久力」、「ドリブル技能」、「ヘディング技能」、「守備技能」、「力強さ」、「リーダーシップ」の九つの下位尺度から成り立っていることが明らかになった。また、“ユース年代版 サッカー有能感尺度”と命名された本尺度の信頼性については内的整合性および安定性において十分な値が確認され、さらに妥当性については因子的妥当性、内容的妥当性および基準連関妥当性が確認された。

2） 七ヶ月間の観察調査前後において、選手の「状況に応じたパス＆ボールコントロール技能」と「ドリブル技能」に関する有能感は明らかに向上していたが、指導者から選手に与えられた各種「言葉がけ」の頻度は、称賛や励ましといったポジティブな評価でさえ、これら有能感の変容に対して明らかな影響は与えていないことが明らかになった。

3） 「守備技能」に関する有能感については、経時的には明らかな変容は認めなかったものの、その変化量とネガティブな評価の頻度に有意な負の因果関係があることが明らかになった。つまり、守備技能の様に選手からも失敗場面が認識されやすい場面において、指導者からの否定的なフィードバックの頻度が高まるほど、関連分野の有能感が低下する可能性があることが示唆された。

さらに、指導行動としての「言葉がけ」の認知に及ぼす選手の身体的有能感の影響について検討する（第 4 章【研究 5】）ために、“ユース年代版 サッカー有能感尺度”を用いてサッカー有能感水準を評価し、有能感水準の異なる選手の指導者の「言葉がけ」に対する認知の差異について検討した。その結果、以下の諸点が明らかになった。

1）プレーとは無関係な声かけを指導者から受けた場合に、サッカー有能感の高い選手の方が低い選手よりも指導者からの受容感を強く認識していたことから、高有能感の選手と指導者との間には指導―被指導関係が成立していたと考えらえる。この指導―被指導関係の成立は、選手自身が自己概念と一致しないフィードバックを受けた場合でも、その認知を促進し得るといわれていることから、実際の「言葉がけ」の頻度と認知された「言葉がけ」の頻度にズレが生じたと推察される。

2） 選手が実際に指導者からネガティブな評価を受けている頻度が高いほど、選手が指導者から叱責を受けていると認知する頻度も高くなる傾向があることが明らかになった。しかしながら、それ以外の「言葉がけ」については明らかな関連性は認められなかった。

以上より、中学生年代のサッカー指導者は、期待値の水準の異なる選手に対して異なる「言葉がけ」を行っているが、指導者の「言葉がけ」の認知には選手自身の自己概念の主要構成概念である身体的有能感よりも、選手と指導者の関係性が影響を与えている可能性があると推察される。しかしながら、失敗時における指導者からの否定的な評価は、指導者との関係や自身の自己概念に左右されず、選手に認知され得ることが明らかになった。